

【研修報告】

大阪大学21世紀COEプログラム

「第4回全国高等学校歴史教育研究会」参加報告

過去4年間、夏の恒例行事であった大阪大学主催の高等学校歴史研究会（初回は「世界史教育研究会」）は、COE事業の満期をむかえ今回が最後となった。これに換わるあるいは継続する試みがあるのかの形で行われることが望まれるが、本県の歴史分科会では新たな企画を計画中である。では、前年夏の研究会の報告をしておく。

第一日（八月一日）

初日、午後の講演は森安孝夫教授による「世界史上のシルクロードと唐帝国」の講義で始まった。日本人がシルクロードと唐帝国に惹かれるのは、唐が仏教王国であり東アジア文明圏を形成して日本文化に大きな影響を持ったためだが、その唐の評価を新しい視点で展開した。内容については、本報告の講演要旨と重なるものがあるので、要点だけを列挙しておく。

*「世界史の構想」。経済力（食料生産力・商工業・エネルギー）、軍勢力、情報収集伝達能力に着目し、長期波動を8段階に区分。

*四〜五世紀の東西の民族大移動は、遊牧騎馬民族の侵入による。

一〇世紀「征服王朝」から一二世紀のモンゴル、さらにオスマン、ティムール、ムガル、清へ続く。

*中国歴代諸王朝の半分は非漢人系。中央アジア〜西アジアを支配した王朝の大部分はトルコ系。

*シルクロードは単なる「三本の道」ではなく、奢侈品中継貿易の「ネットワーク」で南北にも走る。

*ソグド人東方発展史研究の新動向の報告。武人・外交官・政治家として中国で活動、隋末唐初に軍団を形成し唐の建国に貢献し、「玄武門の変」にも助力している。

*唐の本質は拓跋国家で多民族国家。建国の担い手は鮮卑拓跋氏の後裔プラス漢人集団。建国時は東突厥の「臣属国」。六三〇年、太宗李世民が東突厥を征服し、草原世界の覇者「天可汗」の称号を奉られるが、西突厥が存在。真の「世界帝国」ではない。

*唐が「世界帝国」たるのは、西突厥の征服から安史の乱まで。以後はウイグル・テイベットの侵入に悩む弱体政権に転落した。

第二日（八月二日）

森安教授は百枚を越す質問票に、A4版5枚のメモを配布して回答した。前日夜に質問を見て朝6時から回答を作成された熱意には頭が下がる。一部を紹介する。

イスラームを唐代には「回教」とは呼ばず、其教／聖教と呼んでいた。モンゴル時代のウイグル商人はほとんどが仏教徒。他方、旧カラハン朝やホラズム朝出身のトルコ系商人は、同じトルコ語を話すムスリムで、それが回回商人と呼ばれた、等々。

続く平雅行教授の講演「鎌倉新仏教論はなぜ破綻したか」。法然、親鸞、道元、日蓮などのいわゆる「鎌倉新仏教」について。

戦後の日本史学では、中世は武士（在地領主）の時代で、鎌倉新仏教が中世的な仏教、律宗、天台宗、法相宗は「旧仏教」とされる。しかし「中世」は封建貴族に再生した貴族・寺社と武士との「協調の時代」で、依然旧仏教の思想的影響が圧倒的で、「鎌倉新仏教」の影響力は民衆の中では少数派であった。つまり「鎌倉新仏教」とは、近世（江戸時代）に宗派として認められ、鎌倉時代に宗祖を持

つものに過ぎず、判断基準は近世にある。そのため「鎌倉新仏教」を中世仏教史の分析概念として用いることは有害無益である、と力説した。

「旧仏教」は中世において質的転換を果たしていた。律令体制の破綻、国家財政の危機により僧尼は特権を失った。しかし一方で、貪欲な受領と粗暴な武士による国衙支配の強化に対し、民衆と寺社（悪僧・神人）らが抵抗。これが「旧仏教」発展の原動力となった。また悪人成仏・女人往生思想も浸透し、平安末期には戒律重視の運動がおき、鎌倉時代には僧侶の武装も不要になる。こうして権力に従順で宗教的情熱に満ち、清廉潔白な僧侶たちが、朝廷や幕府から寺社再建事業や交通路整備などの公共事業の受皿として重用される。すなわち「貴族仏教」ではなくなったのである。

法然、親鸞、道元、日蓮は、このような支配への仏教の利用に反発し、仏法もとの平等を説き権力からの自由を求め、異端として弾圧された。戦国時代以降には現世でなく来世の祈りが中心の葬式仏教が発展する。そして浄土宗・真宗・日蓮宗・吉田神道などが爆発的に発展するのである。

午後前半は秋田茂教授の「一九三〇～一九五〇年代アジア国際秩序とイギリス帝国―グローバルヒストリーの視点から―」。

一九三〇年代、オタワ会議以後もイギリスの輸出入はブロック外にもかなり及んでいた。金融面でも中国国民政府は一九三五年の幣制改革ではスターリング・ポンド圏内に入っている。日本も、英領インド帝国との第一次日印会商（一九三三～三四）において原綿の輸入と綿製品の輸出をしている。

第二次世界大戦後、一九五〇年代の東アジア国際秩序におけるス

ターリング圏の経済的重要性は継続した。しかし低開発スターリング圏諸国へのイギリスの消費財供給は不十分で、日本は繊維製品をこれらの諸国に輸出した（一九五一年の輸出の45%はスターリング圏向け）。一方、日本への輸出は一九五二年で圏外輸出の12%を占め、パキスタンの原綿、オーストラリアの大麦、英領マラヤの鉄鉱石、インドの第一次産品と雑貨などが主で、アジア・スターリング圏と日本の経済復興は、互いに積極的に利用しあっていた。従ってアメリカの経済的ヘゲモニーは東アジアでは一九五〇年代にはまだ「留保」がつく。ヘゲモニーの推移は近代世界システム論の基本であるが、単純に図式化はできないと結論づけた。

午後後半は、桃木至朗教授の「東南アジア史 誤解と正解」。高校で東南アジア史を教える意義・方法・課題、東南アジア史を研究する視角を提示し、続いて教科書や大学入試問題における東南アジア史の記述の誤りを具体的に指摘した。

【表記】ゴードン・ジェムが現地音に近い。ベトナムでは姓の種類が少なく、一般には最後の字で呼ぶので、「ゴ政権」は間違いで「ジェム政権」。インドネシア語では「イスラーム」でなく「イスラム」と発音し「サレカット・イスラム」が正しい。現地語主義も程度問題であるとのこと。

【地図】サイゴン（ホーチミン）はメコン川水系ではなく、ナイ・サイゴン川水系。「メコンデルタにあるサイゴン」は誤り。ハノイの外港ハイフォンは一九世紀開港。一七世紀の日本船寄港はありえない。マジバヒトは港市国家の連合体で領域支配はしてないから最大版図の「色塗り」は無理。

【その他】ジャワ島の歴史は「仏教→ヒンドウ教→イスラーム」の

三段階ではなく、「仏教・ヒンドゥ教併存→イスラーム」の二段階。セデス流の「紀元後にインド人移民によって国家が形成」は誤りで、紀元前後に初期国家形成が進み、一〜二世紀ころメコンデルタ中心に港市国家連合（中国史書で「扶南」）が成立、が適切。陳朝の「チュノム」は、日本の万葉仮名や国字と同じ。漢字を知らなくても使える「民族文字」ではなく、カナやハングルと同列には扱えない。

桃木教授は、教科書を信じる発想そのものに問題があること、イメージをもたせるために詳しく説明するのはよいが、暗記する項目はミニマムを目指すべきことを強調した。

第三日（八月三日）

午前の部前半は、3教授がそれぞれ回答を用意し、一人三〇分、プラス質疑応答三〇分で、計二時間におよんだ。

平教授の回答の紹介。古代の荘園には「住民」がいない。領域があり、山野河港・田畠・村落がある荘園が登場するのは院政時代。やつと荘園制は成立し応仁の乱まで続く。この時代を中世と呼ぶが、単純に「武士の時代」と規定できない。「武士の時代」という位置づけは、日清・日露期の政治的主張で、「清新で質実剛健な幕府・武士」と「腐敗した京都」の対比であり、「東亜の新興軍事国家日本」と「腐敗した中国」へのダブルイメージに利用された。

石母田「領土制論」は、武士こそが中世的世界の唯一の主体であり、武士に抵抗した神人（じにん）を非難したが、（武士とは本来人殺しの暴力組織！）百姓は過酷な武士の支配よりは、村落運営の自主性を認める荘園領土の支配を望んだ。

中世では「神仏同体」だったが、僧侶に握られていた神社への神

官の不满が吉田神道の発展の背景にあった。

宗教論の観点から平教授は言う。神仏にははっきりとした異質性がある。仏は「戦わない」が、神は「戦う」。読経や祈祷が、神の戦う力をパワーアップする。戦没者を「神・神兵として祀る」とは、徴兵を解除せず戦いを強制しつづけることで、靖国神社は「鎮魂」の社ではない。

阿弥陀仏の救済対象は聖人君主ではなく、普通の凡夫であるとの考えは、中国浄土教以来の伝統的普遍的考えであり、「悪人正機説」は親鸞の独創ではなかった、等々の回答がなされた。

秋田教授の回答。インド棉は短繊維で厚手の安価な綿布を織るのに使われ、アメリカ棉は長繊維で薄手の綿布を織るのに用いられた。大阪の紡績業の競争力はその両者の混棉を用いる技術にあった。日本は、朝鮮・満州で「円ブロック」を形成したが、金融面ではス

ターリング圏に包摂されていた。

「アジア間貿易」の発展は非常にユニークで、世界システムにおいて「相対的自立性」があり他に見られない。その「自立性」を支えたのは、華僑や印僑などのアジア商人のネットワークであった。

桃木教授の回答。マジヤパヒトの「色塗り」は、セキュリーヴィジヤヤマラッカ王国にもあてはまり「ゆるやかな連合体の盟主」という程度。マラッカ王国はまともな領域を持たず、食料すら自給できずミャンマー・タイから輸入していた。バンコク朝の正式な「自称」は「ラタナコーシン朝」。アンコール時代のカンボジア王二六人のうち、血縁で王位を継いだといえるのは八人だけ。

現地人はひたすら暴力的に弾圧・搾取されていた、という通俗的植民地支配理解は、「かわいそうな弱い人々」という蔑視と紙一重

の憐憫を植え付ける危険がある。植民地型開発により、「現地の富の絶対値は減少」ではなく、富も増え人口も増大している。東南アジアの推定人口は一六〇〇年に二千万人、一八世紀から急増し現在五億人（結果原生林は消失しつつあるが）。東南アジアは、東アジアの生真面目さを持たず、植民地支配への強固な反感よりも実利的な関係を重んじている。また「国民国家の原型」が存在せず、植民地侵略者は一国だけではないので、ナショナリズムの基盤も憎しみの対象も一つに収斂しにくい。ASEANはEUと違い、「国民国家が互いを強化するための協力装置」と評価される。

午前の部最後は大阪教育大学付属高の笹川裕史教諭「生徒が参加する世界史授業をめざして」。1時間の授業のなかに「感動」をつくり（驚き・笑い・納得・共感など）、「モノ」「話術」「エピソード」「発問」を通じて知識構成主義を乗り越えようとする「イベント」授業の実践報告である。

*一六一年四月二三日はシェークスピアとセルバンテスの命日だが、暦が違うので同じ日に死んでいないことに気付かせる。

*七五三年の古麻呂の遣唐使の新羅との席次争い。唐側の措置と「正史」に記述のない理由と事件の真偽を考えさせる。

*一四九二年のコロンブスの『航海誌』。インディオ観察・推測の確性を指摘し、インディオをどのように見たかを考えさせる。しかしテーマについては、ナショナリズムの古代への投影、西欧キリスト教徒の無知・独善性の強調などの危うさもあり注意を要するところである。

午後は大学院生や教授も加わり「歴史学と歴史教育の連携」について4グループでの討論、その後全体討論が行われた。阪大での世

界史未履修者対策の開始、大学側が求める高校生像と大学生の実情、高校教育に求めること、等々が報告され「まとめ」が提案された。今後も歴史学（大学）と歴史教育（高校）の連携に取り組みとして、以下4点を挙げた。

- 1 大学側の最新の研究成果を高校教員に継続発信する。
- 2 新旧の「枠組み」が混合した教科書の内容を改善するため大学教員と高校教員が協働で進めていく。
- 3 教育技術と豊かな知識を持たねば、多様化する社会のニーズに対応できない。大学側は歴史学の授業を高校教員のリカレント教育の場として積極的に開放する。
- 4 進学してくる大学生に対応するため、大学側でも高校教育の現状を注意深く把握し、それに見合った大学教育を展開していく。

過去四回、全国四十三都道府県約二六〇名以上の参加者があり、今回の研究会も満員。メディアによる取材もあった。この研究会を報じた新聞記事を掲載しておく。

神奈川県では、世界史研究推進委員会のメンバーを中心にこの研究会に積極的に関わり、毎年十名前後が参加してきた。今回六名の推進委員を含め九名が参加した。この縁で二〇〇六年三月の歴史分科会研究発表会では講演に桃木教授をお招きし、さらに二〇〇七年三月には森安教授の講演が実現した。大阪大学に感謝するとともに、今後も何らかの形で研究会継続を望むものである。

（厚木商業高校 小林克則）
追記 四名の教授が講演時に配布したレジュメは大阪大学文学部東

洋史学研究室HPにて閲覧できる。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/toyosi/main/>

「臨床の歴史学」に熱気

阪大 高校教員120人、意見交換

単眼
複眼



「像を結ぶ」歴史教育をどう実現するかをめぐり、参加者の意見交換も熱がこもった＝3日、大阪大で、同大提供

世界水準の研究拠点形成を狙うという21世紀COEは、人文系は海外の研究者を招いたシンポジウムが流行だが、大阪大の歴史研究

者たちのプロジェクトは異色だ。教育現場に最新の研究成果を伝える「臨床の歴史学」を旨指すとして、全国の高専教員の旅費に予算120人が参加した。

「阪大史学の挑戦」とのテーマにふさわしい熱のこもった講演が続いた。森安孝夫教授(中央アジア史)は「世界史上のシルクロードと唐帝国」と題して、遊牧騎馬民族の重要性を語った。馬は最も強力な兵器であり、それを操る遊牧騎馬民族は情報収集能力も高かったが、農業生産力やその技術を尺度とする歴史観か

ら軽視されてきたと説明。彼らが相次ぎ国を建てた10世紀前後にユーラシア史の転換点があり、13世紀のモンゴル帝国は、中央ユーラシア型国家の完成にあたる

に力があつたのは法相や天台などの「旧仏教」で、「新仏教」の社会への影響は戦国時代まではゼロに近かつた、と力を込めた。

えられている。入試ではより広範囲にわたる細かい知識が求められ、一段と「記憶の科目」との様相が強くなり、生徒の歴史離れが進んでいるとの声が高い。

と強調した。また、「シルクロードは道ではなく、ネットワークの面として理解するべきだ」「中国史ではなくユーラシア史を構想しよう」などと呼びかけた。

世界史の教科書に盛り込まれるようになった「世界システム論」については西洋経済史の秋田茂教授が、東南アジア史は桃木至朗教授が、具体的な例を示しながら解説した。

「驚いた」「見方が変わった」といった声に参加者には多く、こうした機会を増やしてほしいとの要望も目立った。4年間で参加者は43都道府県にのぼり、この研究会がきっかけとなり、類似の研究会が始まったりしている。だが、プロジェクトは最終年度で今後の行方はわからないという。「考え方や背景がわかる」歴史教育の実現を目指す、全国から集まった熱意を定着させる方策が、行政にあってほしいのではないだろうか。(渡辺延志)

「鎌倉新仏教論はなぜ破綻したか」と題した平雅行教授(日本中世史)の講演も刺激的だった。法然、親鸞、道元、日蓮らの思想を知っても鎌倉時代の仏教を知ったことにはならないというのだ。「鎌倉新仏教」は江戸時代に認められた宗派のうち、鎌倉時代の宗祖をいいただいたもの。鎌倉期

講演のたびに数十枚の質問紙が集まった。翌日の冒頭に回答する仕組みで、読むだけでも夜遅くまでかかったはずだが、どの教授も丁寧に説明していた。それでも納得できなければ電子メールで聞いてほしい、との呼びかけもあった。

歴史学は近年、大きく様相を変え、多様な歴史が唱